

## 「藪」 ～連句往来～

前句にあった「除雪」という言葉を受けて、茄言は次のように詠んだ。

⑮ この先に絶景あると藪を漕ぐ

茄言

茄言は退職後、テニスと登山に本腰を入れた。一〇キロマラソンにも挑み始めた。やれるうちにやれることをやっておく、というのが彼のモットーだ。平均寿命はまだまだ先だが、男性の健康寿命は七十代前半で終わる。その後の人生は、何らかの形で他者の支援を受けながら日常生活を送ることになる、とすれば、残り時間は限られている。

趣味の中では大学卒業まもなく始めたテニスが軸になった。毎日のようにテニスクラブに通っては、来合わせたメンバーと即席のコンビを組んでダブルス戦を楽しんでいる。

生きがいとは何だろう、という問いがしばしば脳裏をかすめる。

明確な答えには辿りつけていないが、今できるぎりぎりのところまで身体を動かしている時間には、生きているという確かな実感が持てた。逆に言うと、それ以外の、例えば読書や映画鑑賞、音楽鑑賞には、生きがいを見い出せないでいた。

生きがいの「かい」に漢字を当てれば「甲斐」「詮」になり、効き目や効果、値打ちという意味だが、退職後の趣味道楽に値打ちを求めることは不可能で、効き目や効果も、健康の増進もしくは維持といった副次的なものにとどまるだろう。さらに言えば、瞬発力や持久力は日々後退する一途だろうから、がんばって維持に努めるのがやっとなというのが実情だろう。

とはいえ、痛みに近い脚の疲労を感じながら登った山道の先に突然広がる絶景を眺める瞬間には、格別なものがある。⑮句はこの気持ちを素直に詠んだ。

藪を漕ぐという言い回しも、山に親しむようになった定年後に初めて実感した。藪を横切るには手も脚も使って全身で進むから、なるほど、「漕ぐ」という言葉がふさわしい。

付け句にどんな絶景をもってこようか、と周天は考えた。

すぐに思いついたのは、赤城山の山頂から眺めた関東平野の眺望だった。左前方には筑波山、中央には遮るものがなく東京のビル群が見える。スカイツリーはひときわ目を引く。右に目を転じると富士山。いつ見てもほれぼれする形の均衡だ。

だが、除雪から藪漕ぎと詠み継がれた連句で、さらに山頂からの景色を詠んででは停滞感を招かないだろうか。

とすれば…

思いついたのは「絶景かな、絶景かな」というフレーズだった。

歌舞伎の『山門五三桐』の二段目「南禅寺山門の場」で石川五右衛門が発する名文句であり、周天は、中村芝翫と中村扇雀という成駒屋の二枚看板の熱演を観たことがあった。

千秋楽のチケットがたまたま手に入ったのである。

千秋楽には独特の活気がある。これで終わりという解放感が役者たちの遊び心を発揮させるし、何度も観てきた扇屋連からすれば、次第に見せ場が固まり、セリフの間や抑揚に何とも言えない色気を帯びてくる。大向こうと役者の意気も合ってきて、掛け声と見得との絶妙な間合いが出来上がってくる。

その日は、大向こうから「たっぷりたっぷり、大たっぷり」という声が掛かった。千秋楽見納めなのだから思うさま演じてほしいという馴染みの客からのねだり声だったので、芝翫が思わず吹き出さんばかりの笑みを浮かべたシーンは、これぞ歌舞伎の面白さと感じられた。

⑯ 都大路をにらむ五右衛門

周天

短句七七にどうやって「南禅寺」という五文字を入れようかとしばし悩んだが、「五右衛門」の四文字を入れ込むのを最優先に考えると、残りがわずか五文字になってしまう。そこで、「南禅寺」は諦めた。五右衛門が見下ろす相手の真柴久吉（羽柴秀吉）の名は入りようがなかった。

短句七七の下句は三拍・四拍の組み合わせが語呂が良いとされる。そこで、下句は「〇〇〇五右衛門」としたい。では、上の三文字、そして上句七文字には何をあてはめたらよいだろうか。

山門で大見得を切る五右衛門、そこで、「にらむ五右衛門」という表現が浮かんだ。これで決まった。では、上句はどんな七文字にしたらよいか。

迷った末に、「都大路を」とした。南禅寺は都の大通りからかなり東に入った山手に位置しているので事実にはやや反する言い回しになったが、天下人真柴久吉の命を狙う五右衛門の気概からすれば、都という語のスケール感は適切だろう。

次の詠み手は春芳。

金融機関の役員を務めて退職したが、融資の責任者の時にはさまざまな修羅場をくぐり抜けてきた。新興のベンチャー系の社長にはオトナ同士の通常のマナーをわきまえない輩が多く、日の出の勢いをいいことに無理無体な条件を突きつけてくることがある。態度の是非はさておき、その企業の今後を冷静に査定して、利子の回収や今後のさらなる融資の可能性を吟味して対応してきたが、そういうベンチャー系の社長は、逆境にはとりわけ弱い。ひとたび業績が悪化すると冷静さを失ってギャンブル性の高い分野に方向転換しがちだ。そして、資金がこげつき始めると、かつての横柄な態度から一変し、融資を乞うために土下座までしてすがってくるようになる。

たかがカネ、されどカネ。カネによって人が無残に操られるさまをこれまで何度見たことであろうか。また、金融の業務の過酷さに耐えられずに退職してしまう若手職員や、メンタルを冒されて休職を余儀なくされる中堅職員を何人も見てきた。

そうしたサバイバルレースの果てに役員に上り詰めた春芳は、運とそれ相応の精神力を持っていたのだろう。だが、いわば生き残った側にも、なぜ自分がおめおめと生き残ってしまったのだろうかという「サバイバル・ギルティ」にたびたび苦しめられるのが現実だった。

その苦しさから逃れられるのが文学の世界だった。彼は小説をひそかに執筆していた。本名を明かさずに書いた長編小説『乾いた風が吹く街から』が、かなりの反響を呼んだこともある。

小説には緻密な構成力が求められるが、連句は即興性と軽妙な展開が求められる。小説執筆がそもそも金融世界の重圧からの解放だったが、その小説執筆からのさらなる解放が連句にはあった。

連句仲間からは「飛ばしの春芳」と呼ばれる。

付け句には、前句の心情や風情をとらえて付ける「有心」や、登場した人物の相手側を想起して付ける「向かい付け」、叙景から人情を引き出す「起情」などがあるが、春芳の得意にしているのは、前句の語調に対応する「拍子」や色彩を思い浮かべる「色立て」、あるいは前句の人物の衣類・持ち物に着目して付ける「あしらい（会釈）」であり、思いがけない土地や場面に誘う手法だった。

⑰ 風呂帰り手ぬぐいさげて花の下

春芳

「五右衛門風呂」という連想から付けた。

真面目な連衆は、前句の五右衛門あるいは真柴久吉から、安土桃山といった時代性や盗賊の世界に発想が制約されることが多い。

十七番目の句は、歌仙形式三十六句のうち二箇所だけに定められた「花の座」に当たり、春芳の句は、風呂上がり気分の花の下を歩く心地よい一句になった。

と、すかさず茄言は次の一句を付けた。

⑱ 今年も軒に燕巢作り

茄言

春芳と茄言は東京で学生時代を送っている。ともに、銭湯の経験がある。

茄言はその銭湯の切り妻造りの入り口から右手奥に続く瓦屋根の一角に、燕が毎年巣をつくるのを楽しみにしていた。ひなの巣立ちまでを毎年見送った。それが、専攻する数学に沈潜する毎日の、小さな息抜きになっていたのである。

故郷群馬にいるときよりも東京暮らしになって、むしろ四季折々の風情を味わうようになった。東京には想像していた以上にたくさんの自然があった。

⑲ メーデーの旗ひるがえり人の渦

周天

周天も、春芳を真似て句を大きく転じることを企んだ。

燕の巣からメーデーへ、人によってはそれが暦のような風物詩になっていることもあるだろう。

だが、ここでの連想は、燕返しから旗のひるがえりへ、というイメージの連関だった。春という季節にひるがえるもの。そして、軒端から社会的連帯という広がりへ。

歌仙を一巻仕上げることを「満尾」というが、巻き上げたあとで、酒を飲みながら各句をふりかえる「満尾の会」も連句仲間の楽しみの一つである。というより、満尾の会を目当てに句を詠み合うといった下心もないではない。

満尾の会は、勝敗が決まったあとに局面を再現しながら、あの手はどうだった、この手をこうしていたら、と振り返る将棋の感想戦に似ているのかもしれない。振り返りによって理解は一層深められる。

前句の意味が分からないまま句を付けることもある。誤解してかえって面白い展開になることもある。

この⑱句の転じ方は、満尾の会を盛り上げるに違いない。

⑳ 混乱の中ひとりたたずみ

春芳

㉑ 世のなかを六畳一間から眺む

茄言

メーデーの熱狂に自分を合わせることができない孤独を⑳句は詠み、労働者の集会に我関せずと下宿で数学に挑みつづける実体験が㉑句では詠まれている。

連衆の三人は同じ高校の同期生。学生紛争が下火になった一九七一年に高校入学している。その翌年には例の浅間山荘事件が起こり、闘争の悲惨な末路が高校生にも強く印象づけられた。高校生活にも無気力・無責任・無関心の三無主義が横溢した。

だから㉑句にはそうした気分を身に纏って大学生生活に入った当時の実感が正確に反映されている。

㉒ 「今日は泊めて」とぼそり言われて

周天

その下宿に、同じキャンパスで知り合った女子学生が来て…

名残折り裏に移って四句目、そろそろ恋句を、と周天は考えた。学究の徒のおさくるしい部屋に小悪魔を闖入させてやろう、といういたづら心も働いて詠んだ一句だった。